

電子気功装置・使用法

渡辺 満（静岡県）

§0 はじめに

科学が起こるよりも、ずっとずっと昔から、一部の人たちは、“気”の存在を知っていた。

日本語の中には、“気”の付く言葉が、数え切れないほどあるが、そのことから、“気”が、いかに大事なものであるか、昔の人々は、よく理解していた。

別のところに書いたが、僕の理解では、“気”は、たぶん素粒子論の言う、“ヒッグス粒子”だろう、ということになる。
この解釈では、色々なことが、つじつまが合ってよい。

気は、生体と深い関わりを持っている。
それは、生命力の1面を持っている。
元気な人は気が多く、病気の方は気が減っている。
子供は、多くの気を持っているが、年を取るにつれて減る。
それなら単純に、体に気を入れれば、若返るのではないか？
ということになるが、この発想は、的外れではない。

気は、木や花などからも出る。
例えば、満開の桜や、満開のツツジなどからは、強烈な気が出る。
人々は春になると、満開の桜の下で宴をやり、
花に酔い、酒に酔い、気に酔う。

花がなくても、大木からは、よい気が出る。
木の幹に手を当てて、それを直接、体に吸収することができるし、
漠然と森林浴とすることもできる、次が良い感じ。

クヌギ、サクラ、ヒノキ

‘気’と‘木’が同じ読みなのも、偶然ではないかもしれない。

その昔、役行者(えんのぎょうじゃ)は、奈良の吉野山に、
1万本の桜を植えさせたという。

彼は、桜の効果をよく知っていたのだ。

次の話も、気に関係する。

「雷の多い年には、シイタケがよく採れる」という、本当らしい。これは、雷放電から発生した強い気が、大気中に舞い、シイタケの成長に、うまく作用するから、かもしれない。

また、シイタケ栽培に、もっとも適した原木は、クヌギであるという。ここにも、クヌギが出てきた。

先日、フランス料理で有名なキノコの‘トリュフ’が、日本でも、採れるという話を聞いた。クヌギの林で、落ち葉を掻き分けていると、黒い色をしたトリュフが、見つかるのだそうだ。

ヒノキについて言えば、

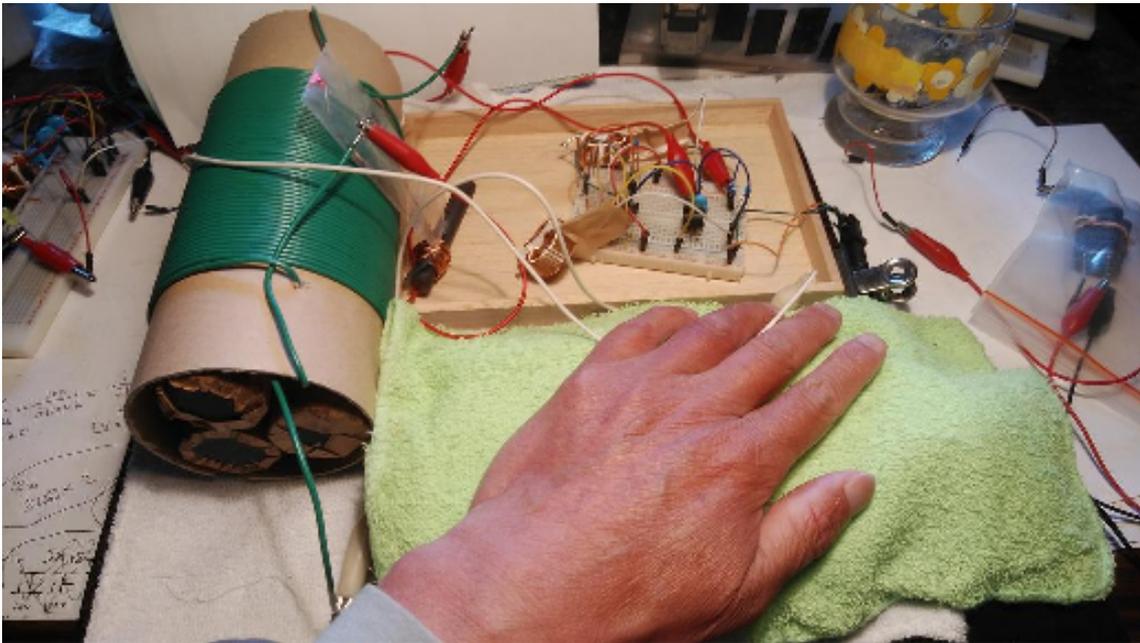
よく、寿司屋のガラスケースの中に、寿司のネタを、ヒノキの葉の上に、乗せてあるのを見かけるだろう。あれは、ネタの鮮度を、保つためかもしれない。一方、‘ヒノキ湯’というものもある。

風水では、大地の中を流れる気を、竜に例える。そして、それが地上に噴出する場所を、「竜穴」と呼ぶ。

例えば、東京の高尾山などは、竜穴だろう。山梨県の奥深くから、脈々と伸びた山々が、関東平野に突き出る、その先端が高尾山である。高尾山が竜穴であっても、不思議はない。

竜穴から、ドラゴン(Dragon)の名をもらい。SF 映画「スターウォーズ」の中での気の呼び名、フォース(Force)をもらって、僕の開発した気の発生装置を、電子気功装置「ドラゴン・フォース」(Dragon-Force)と命名した。

§1 電子気功装置「ドラゴン・フォース」 使用法



基本的には、片方の手の平を、この装置の水晶袋の上に乗せ、その手の平に、意識を集中する。

すると、水晶から出た気が、手から体内に入ってくる。

そうならない人は、まだ気道が詰まっているので、

予め、呼吸法・体操・入浴などをやって、浄化する必要がある。

ホコリの詰まったスポンジは、水を吸わないが、

きれいにされたスポンジは、水をスーと吸う。

何か変だと感じたら、一端中止して、様子を見る。

人によっては、クンダリニーが覚醒する可能性がある。

そうになると、人生が変わるほどの、大ごとになるので、

自分をよく観察し、慎重に行う必要がある。

僕の感想では、

クンダリニーは、根源的な生命エネルギーで、太陽からやって来る。

霊的な太陽は、生命の母であり、真の愛である。

来てます、来てます、ドラゴン・フォース！

§2 足の指をつまむ

先日、1年半ぶりに、また腰痛に襲われた。

今回は、前回よりも重症。

しかし、これを絶好のチャンスと考え、いろんなことをやって、この装置の、最も効果的な使用法を、探し出した。

基本的には、片方の手の平を、この装置の水晶袋の上に乗せ、もう片方の手で、体のあちこちを指圧するのだが、問題は、どこをどうすれば、最も効果的なのかだ。

今回の腰痛は、横になっても痛い。

だから、眠るのも大変、寝返りが自由にできない。

生きた心地もしない。

途端に、これを解決するのが、最優先課題となった。

体のあちこちを押さえたり、つまんだり、するうちに、

あることをすると、

腰痛が、急にスーと軽くなることに、気がついた。

それは・・・

空いた片方の手で、足の指の1本1本を、

ギュギュと、力を加えながら、つまむ。

特に、親指を集中的に、つまむ。

すると、体の芯へ気がグイグイと入り、

目にも強い刺激が行く。

これを15分ほどやって、立ち上がると、

「あれ」腰に痛みを感じずに、立ち上がった。

また、あるとき、これをやっているとき、

両目からボロボロと大粒の涙が流れ、

次から次へと絶え間なく、大アクビが出た。

こんなことは、日常的には、まずないだろうが、

たぶん、浄化(カタルシス)が生じている結果だろうと、

出るがままに、まかせた。

これを毎日、1回15分で3回ぐらいたやる。

半月ほどして、腰痛は、ほぼ消えた。

どういうメカニズムなのかは、わからないが、
気で、腰痛が治るということは、
腰痛は単に、気の病だということになる。

気によって、腰痛が軽くなったり、
カタルシスが生じたりするのは、
この行法が、特に腰痛に適合しているから、というより、
むしろ、自然治癒力が増大した結果だろうと、考えている。
たぶん、これは、もっと別の病気にも効くだろう。

自分で作っておいて言うのも何だが、今さらながら、
これは正に、「魔法の装置」である。

§3 大木巡礼の行

すでに述べたが、1年半ぶりに、また腰痛に襲われた。
この装置を使っているから、もうならないだろう、
と思っていたが、まだ何かが、足りないらしい。

確かに、電子気功装置 DF をやると、気道が洗浄されるらしく、
体の気の通りが良くなる。

もっと欲張って、まだ、何かが足りないとすれば、
そこへ、きれいな気を送り込むことだ、と推察した。

そこで、“大木巡礼の行”というのを考えた。
近隣の地を歩き回って、ヒノキの大木や、
その他の広葉樹の大木を捜し、
(直径70cm 以上)、
その木の幹に、手のひらを当て、目を閉じて、木から気もらう。
できるだけ、手のひらに、意識を集中するようにと、
木に当てた手の指先を、ピクピクと動かしながら、
頭の中で130ぐらい数える。
左右の手を替えて同じことをやり、
これを左右1対で、“1本”と数える。

野山を歩き回りながら、これをやる。
16本ぐらいやると、体に気が入り、
体が、しっかりしてくるのがわかる。
やがて急に、嘘のように、足取りが軽くなり、
閾値を超えて、再生の扉が開く。
ここまでやると、達成感やら自信やらで、幸福感に包まれる。

なるべく、人目の付かない木を選ぶ。
怪しい人に、見られたくないから……。

2020年4月発行

著者：渡辺 満， 発行者：渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2020年